
コード

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「コード

【作者名】

N7133A

【作者名】
ランタン

【あらすじ】

いじめられつこの加奈に届いた、一枚の手紙。それは、かつてない壮大な運命の始まりだった
・・・

プロローグ（前書き）

この『コーズ』という小説を書くにあたって、少し不安とかあります、ゆっくりと書いていきたいと思います。

プロローグ

誰もが知らないような昔に、コードという神がいた。

その神は、無愛想だったので、人間のために何かをしたりという偉大なことはしていなかつた。

しかし、コードは未来の1人の少女のために、一枚の手紙を書いた。

それが、その少女の運命を変えるとも知らずに

・・・

第一話 涙は流れ

「ふう・・・」

加奈はため息をついた。

私は、生きてて価値のある人間なのかな?
だれか、私を必要としてくれる?

今日も、上履きを隠されたり、『死ね』『アホ』とかの暴言を吐か
れたりした。

典型的ないじめられっこ。

自分でも、それがぴつたりなイメージだとわかつていた。
「だからって・・・」

やつぱり辛かつた。

「ただいま。」

玄関に入ると、母さんの声がする。

なぜだかほつとして、リビングに入った。

「おかえり。」

そつと置いて、母さんは食卓を指した。

「・・・今日も?」

加奈が食卓の上にある冷凍食品を指差していった。

「うん。帰りは遅くなるだらうから、食べとこ。」

いつからだらうか。

・・・・・・・・・・・・

母さんが外に出るようになつたのは。

本当はわかつていた。

母さんは仕事に行くのではない。

『うわわ』をしているのだ。

最初は、そんなに驚いたり、取り乱したりはしなかつた。
それでも、後になつてから、淋しくなつた。

私の居場所なんか、どこにもないんだ。

学校にも、母さんの心の中にも

・・

なぜだか熱い気持ちがこみあがってきた。

「・・・あれ？」

泣きそうになつていると、机の上に手紙が置いてあった。

手紙が来る事なんか、滅多にない上に、来ても大体いたずらだった

り、なんかの宣伝だつたりした。

「・・・」

すこし怪しんだけど、別に麻薬が入つてゐるわけでもないみたいなので、中を見てみた。

そこには、一枚の手紙が入つていた。

それは、なんだか黄ばんでいて、最近に書かれたものではなさそうだ。

「・・・私に・・・・誰が?」

おじいちゃんもおばあちゃんも、加奈に親しく手紙をくれるような人ではない。

別居している父親だつてそうだ。

そう。

彼女は、未だかつて聞いた事のないような、「強運」の持ち主だったのだ。

第一話 一枚の手紙

手紙を開くと、見たことのないような文字が書いてあった。

「なにこれ、読めないよ・・・」

そして、しばらくじっと見ていると、文字が日本語に変わつていつた。

「え?」

そして、そこにはこう書いてあった。

『 幸運あなたへ

この手紙を手にしたからには、あなたには強運がついてまわるでしょう。

そして、その代償として、この手紙を『追う者』がついてきます。あなたがもしこの手紙を手放したいといつなり、この手紙に「×」を書きなさい。

けつしてごみ箱に捨ててはなりません。

それと、『追う者』にとられてもいけません。

その場合は、あなたとその家族の命が危うくなります。

では、幸運を祈つて・・・

『一ズ』

読み終えてから、私はふつと笑つた。

「なにそれ、変なの。ありえるわけないじゃん。」

不幸の手紙以上に威圧感はあつたけど、『追う者』ってなによ。なんだかいじめられている時よりもバカにされた気分になる。

「ばかばかしい。」

そう言って私は、その手紙を封筒にしまって、机の上に放った。

でも、その手紙は正しかった。

次の日からなぜか、いじめられる」とは極力少なくなつたし、逆に人が寄ってきた。

「加奈とずっと話したかったんだけどさ、やっぱり高岡さんたちの前でしょ。そんなわけにもいかなくつて。」

以前親友だった有香が話しかけてきた。

私は、上の窓で有香の話を聞いていた。

それよりも、手紙の事が気になつて仕方なかつた。

私は、そうしていたから気づかなかつたけれど

「野沢加奈、か・・・」

・・・

すでに、『追う者』は動き始めていたのだった。

第二話『追う者』

あの手紙が届いてから、私の運があがっているのは確かだった。周りに人が集まるようになつて、いろんな人と喋れるようになつた。でも・・・あの手紙を送つたのは誰なんだろう?

手紙には『コード』としか書かれていなかつた。でも、あの紙の色からして、何十年、いや何百年昔に書かれたと思う。そしたら、誰が私宛に・・・

そもそも、私の住所をどうやって知つたんだろう? 疑問は深まるばかりだった。

でも、加奈が心配する必要などなかつた。すでに運は加奈の疑問を解決しようとしていた。

「野沢加奈・・・か。」

遠くから加奈の姿を見つめていた男は、ふと思つた。

「どうしてあんな平凡なやつに・・・?」

加奈は何も知らなかつた。

ただ、この手紙がすごい威力を持つていて、うう」としか知らないなかつた。

そう。

加奈が考えていくよりもずっと、この手紙は『すじ』ものだったのだ。

「ただいまー」

誰もいなのはわかつていた。

だけど、加奈は無表情で現実を受け止める。

すると・・・

「おかれり、野沢加奈

声がした。

「・・誰？」

若い男の声だつた。

「俺? もう知ってるんじゃない? あの手紙で。」

そう言って、男は不敵に笑つた。

「まさか・・・」

「そう、そのまさか。俺はあなたの手紙を『追う者』だよ。」

一瞬周りの空気が凍りついた気がした。

手紙の文章を思い出す。

「『追いつ者』って・・じつしてそんなことを。」

「言つて何の得になる?想像したら大体わからない?」

男は、つまらないなさそうに加奈を見た。

「ま、いいや。別に交渉に支障が出るわけでもないし。」

「・・・」

「俺がじつしてあの手紙を追つてるか?それは、神への『復讐』だよ。」

第四話 『追われる者』

「復讐?」

加奈が聞き返すと、男はかすかに頷いた。

「そうだ。」

「・・・どうして?」

「質問しすぎ。もういいだろ。本題に入るが、手紙を見せろ」「嫌です」

加奈が男を拒むと、男は加奈を静かに睨みつけた。

「ふん。全く、コーズの言つ事は絶対的みたいだな。」

「コーズ・・・って誰? 何者?」

すると、男は心底驚いたといつぶつと加奈を見た。

「コーズは『神』だよ。もっとも、この手紙を書くこと以外偉大な事なんてしてないんだけどな。」

「神・・」

「もしかして、まだこの手紙のすゝみに気がついてない?」

加奈が男を少し見てから、「はい」と言つと、男は鼻で笑つた。

「この手紙は、『幸福の手紙』って言われてる。」

「・・・」

「それで、この手紙を手にしたものはとても幸せな運命をたどる。

ただ ・・

「?」

「その手紙に執着させられて、やがて『追う者』になる。」

加奈がまるで理解できないといつ顔をしているのに気が付いて、男はため息をついた。

「つまり、俺がおまえの前にその手紙を持ってたってこと。」

「じゃあ、どうして私の手に?」

「それはわからない……だけど、その手紙によって俺の人生は狂わされた。だから『ーズをうらん』である。」

そう言って、男は加奈をじっと見た。

「いいか? その手紙をずっと持つてたら、いずれおまえも『追う者』になる。だけど、一つだけ方法がある。」

「どんな?」

「その手紙を『追う者』に渡すんだ。」

しばらく沈黙が流れた。

「……そんなの、駄目よ。」

加奈は男を静かに見た。

「でも、そしたらあんたが次の『追う者』になるぜ。」

「じゃあ、どうしてあなたはそうしなかったの?」

すると、男はにやりと笑った。

「いいか? 確かにそれはいい方法だ。だがな、手紙を持っている『追われる者』にとつてはあまりフェアな取引じゃないんだ。」

「どういふこと……?」

「もしその取引が『監視者』にばれてしまつたら、『追われる者』は死ぬ。」

第五話 『監視者』

「『監視者』……つて……」

「あ、言つてなかつたな。『監視者』はコーネズの子孫つて言われてる。だから、考え方が半端じやない。」

そして、男は手を加奈の方に出した。

「？」

すると、手は見えない壁に当たつたみたいに拒まれた。

「わかるだろ？……今この瞬間も誰かが俺とあんたを監視してる。」

男はため息をついて、加奈から離れた。

「今日はこのくらいにしどぐ。でも、次は容赦しねえぞ。」

そうつ聞いて、男は加奈の目の前で消えた。

「『監視者』『追つ者』『追われる者』……」

完全に加奈の頭はこんがらがつていた。

「わけわかんない。私、こんな一枚の手紙に……」

加奈は手紙を見て、固まつた。

文章が変わつていた。

あなたが次の『追われる者』・・・つまりはこの手紙の持ち主です。

たつきの『追つ者』どうでしたか？あなたに全てを教えましたね。

まあ、それもまた役に立つことでしょう。

とにかく、その手紙は今現在あなたのものです。

前誰が持っていたとかは関係なく。

もうじき『監視者』がそちらの方に向かいますので、よろしく・

・

ラーナ

コード4143代表

その手紙を読んで、加奈はぞっとした。
もうじき『監視者』が来る。

どうしよう。

加奈は今までにないような恐怖に陥った。

「野沢加奈さん・・・ですね。」
声がした。

加奈が振り向くと、その人物は優しく微笑んだ。

「あなたは・・・？」

「聞くまでもないでしょ。あなたを監視する『監視者』ですよ。」
その笑顔を崩さないまま、女人人は言った。

「・・・」

しばらく加奈は黙っていた。

この女人人が『監視者』という現実があまりにも信じられなかつたのだ。

「どうしたの？」

優しくたずねてくるこの美人な女人人が『監視者』だという現実が。

「あ、はい・・・」

曖昧に加奈が返事をすると、女人人はぽつりと言つた。

「どうやら『監視者』というだけで拒絶されてるみたいね・・・当然だけど。」

「だつて・・・私は見張られているんですよー?たつた一枚の手紙のために!」

加奈が思い切りヒステリックに叫ぶと、『監視者』はゆっくりと瞬きをした。

「ええ、確かにたつた一枚の手紙だわ。」

あまりにもさらりと言われたので、加奈はなんだか力が抜けた。

「私は、こんな手紙に運命を左右されるのは嫌です」

そういう言葉が自分でも出でくるとは思わなかつた。

でも、本当にそうだつたのかもしない。

あの男の人・・『追う者』のようにはなりたくない。

だけど、死にたくない。

気が付いたら、口から言葉が飛び出していた。

「こんな手紙つ・・・『不幸の手紙』といつたって過言じゃありません！」

『幸福の手紙』

『追う者』はそう思っていたんだろうか。

こんな・・・無力な人間を狂わせるような手紙を。

『幸福になれる手紙』だなんて感じていたんだろうか。

「加奈」

あまりにもそつけなく、『監視者』が加奈の名前を呼んだ。

「『監視者』はどうして『監視者』になつたのか知らない？」

「知りません・・・つ知りたくありません」

「やつ」

それとなく『監視者』はつぶやいた。

「でも、いざれは知るわ。どうして私が『監視者』になつたのか。」

第七話 新たな人物

それだけ言つと、女人人は一瞬で消えた。

「・・・」

本当に、頭がついていかない。

間近で感じた事とか、見たこととか、全てが信用できない。

神が手紙を書いた？

そして、それが私の手に届いた？

私はこれからそれに振り回される？

嫌だ。

どうしようもなく、否定したくなる。

「どうしたの？ 加奈。」

早速仲良くなつた智恵子が、私を心配そうに覗き込む。

「あ、何もない・・・」

「なんかあつたら言つてよ。心配だし。」

智恵子は何でもさりとて言つたが、言葉の一つ一つが信用できる。

「・・うん。」

もしこの世が消えるつて言つただつたら、私はまことに手紙に『×
を書くだろう。

もう一度とこのよつな悲劇が起きないよつこ
誰もこんな一枚の紙に振り回されないよつこ。

それが今私に唯一言えることだった。

それほど自分って信用できないものだったんだ。

手紙を見てみた。

多分・・・いや絶対、『監視者』が来た事で文章が変わっているに違いない。

私のそういう憶測は正しかった。

『野沢 加奈様

このたびは本当に調査協力ありがとうございました。

さて、今回文章を変えてみたのは、ちょっととしたイタズラ心からです。

貴女がこの文章を読んでいる間にちょっととした仕掛けをしてみました。

どんな仕掛けをしたかは見てからのお楽しみと言つ事で

・・・『

そこまで読んで、だいたいの状況がわかつたから、読むのをやめた。振り返つてみると、1人の少年がいた。

『男』と言つには若すぎた。

「あなたは
・・・誰？」

私が不安げに聞くと、少年は微笑みながら言つた。

「『一ズの子孫だよ。』

第八話 選択

「・・・子孫?」

少年は、こくりと頷いた。

「ま、大体の『監視者』はコーズの子孫なんだけどさ。」

なんだか面白そうにくすくす笑われた。

「・・・」

「あ、もしかして、ついていけでない?」

図星だったから、何も言わなかつた。

「やっぱそつなんだ・・・」

少年は、にやにや笑いながらも、目は笑つていなかつた。

「それで?」

いきなり質問されたので、私は少し驚いた。

「え、何?」

「だから、君はどうするの? こんな『爆弾』抱えてさ。」

言われてみればそつかもしれない。

やがて自分は、このままだと『追つ者』になるのだ。

それか、『取引』をして『監視者』・・・つまりはこの少年とあの女の人がどう・・・に殺されるか。

どつちにしりあまり快い死に方ではない。

「あなたは何か方法・・知つてるの?」

「まあ、ないわけじやないけど、誰も実行したことなんかないし・・・

・それに、『×』書けば済む事じやん。」

「そうじやなくて! 私は・・・こんな手紙に振り回されるのは嫌なのつ・・・だけど

「何?」

私は少し思いとどまつた。

本心をこの人に知られていことがあるかどうか、少し考えてみたのだ。

考えた結果、その可能性はとても低いと見た。

「・・・やっぱり、なんでもない」

でも、少年は私の話し方やしぐさに何か感じたらしく、

「幸せなんだ？」

と言つた。

そうだ。

この手紙が私の手元に届いた時から、不幸な事なんか一つもない。誰も私を嫌つたりしない。

その状態に慣れかけている自分がいた。

「・・・そう。でも、その手紙は君だけのものじゃない。未来の人・・・何億人つて人のためにある。」

わかっている。

だから、判断に迷つた。

「・・・わかりました。」

「何が？」

「私、『X』を書きます。」

第九話 消滅

「ふーん?」

少年は私を面白そうにじろじろ見た。

「どうして?」

私にそう聞いた彼の表情は、少し硬くなっていた。
「必要じやないような感じがして。」

嘘。

そんなわけなかつた。

今ここで運を失つたら、きっと、私は自信とかも失うだろ。う。
だけどわかつてた。
それが、正しいうこと。

自分の道は自分で歩くもの。

いつか教えられてもいない『孤独』を身に付けたときに、感じた気
持ち。

今もまだ残つてる。
涙なんか出ない。 立ち止まつたりしない。

当たり前、だと思ってた。
けどちがつたみたい。

私はもともと『独り』じゃない。
違うの。

私の『孤独』は、ただの道筋みたいなもの。だから、それから抜け出すことなんか容易にできるの。

「……本当に、そうするの？」

もはや冷静さを失った少年の声が私の心に響いた。

「ええ。私は、そうすることでき成長できると思つ。」「それで何もかも失つても？それでも、いこつて？」

「当然じゃない。」

もう迷いはなかつた。

私はゆつくりとボールペンに手を伸ばした。小さな斜線を描く。

「……やめろつ！」

いきなり少年が私のボールペンをひつたくつた。

「何するのー？」

すると、少年は私を睨んだ。

「この……手紙は、俺の先祖の手紙だ。だから、この手紙を滅するところには、俺の家系も滅するところになる。」

「そつ。でも、私だつて死にたくないわ！」

私は思い切り少年を突き飛ばして、もう一つの斜線を柔らかに描いた。

少年の絶叫が聞こえて、

この世の全てが消えた気がした。

第十話 決断

悲鳴が耳に響いたとき、もうダメだと思った。

全てが、消えてしまつ……

でも、聞こえた。

真実の音。

『 わ よ な ら 』

消えてしまつんだ。

神も人も生物も、全てが。
でも、それでも良かつたから、『 ×』を描いた。

私の全てをかけた。

「全く、とんでもねえことするよな。 おまえってさ。」

いきなり『追う者』が現れた。

「何しに来たわけ? ……もつ終わつよ。」

「終わりじゃねえよ。」

わいつと言われて、私は少しひるんだ。

「どうして? そんなこと言えるのよ。 もつ…… 私なんか生きて
られないのよ!」

「何で?」

「私は、『 ×』を描いたからよ。」

「わかつてゐよ…… でも、今更だな。」

手紙なんかに執着してたお

「前が悪い。」

どうして?
涙が出た。

私なんか、いるないんだよね?

誰もが、私の存在を否定したよ。 それが日常だった。

当然の仕打ちだと思ってたよ。

でも違った? 違うの?

「つもう……私は消えるの。 さよなら。」

「……本当に、それでいいんだな?」

『追う者』は私の目の前から消えた。

誰もいない部屋に、沈黙が流れる。

私は、わずかな力でペン入れからカッターを出した。

自殺しようって、思った。

だって、いるないんでしょう?

手紙だつて消しちゃつたし、母親は浮気しているし、誰も助けてはくれないし、きっと明日からはいじめが始まる。

いるないんでしょ……

私は、カッターを、自分の手首に持つていった。

涙は、出なかつた。

きっと、私がいなくても世界はなにも変わらずに日常を過ぎていこんだら。

「さよなら

今度は本物の『さくら』。

「こんなことになるなんて、全く予想なんかしてなかつたんだ。

俺は、一人の少女の墓の前で立ち尽くした。

「……」

小さなため息が出た。

不意に5年前の光景を思い出す。
手紙から容赦なく噴出す閃光。

あの閃光には十分な致死量の毒が入つていた。

そしてあの独りの少女は死んだ。

俺はあの少女を『追う者』だつたから、何もできなかつた。

いつそのこと先に殺せば良かつたのかもしれない。

今回の騒動で『監視者』すらも死んでしまつたのだから。

あの女も。

あの女は俺の幼なじみだつた。

でも、一族の運命つてやつて『監視者』にならざるを得なくなつて、
しかたなかつたんだ。

そんな運命に身をゆだねて、何十人もの人間が、死んだ。

たつた一枚の手紙で。

残酷だ、とは思つた。

でも、俺一人の力なんかでどうにかなる問題ではない。

だから、今日はその少女の墓に花を供えた。
せめてもの謝罪。

「悪かつた。おまえに手紙を授けたりして。」

あの手紙は、もともとの手紙の持ち主が、誰かを選んで手紙を授ける。

でも、大体が友人を選んだりするので、被害は知り合いなどに広まつていく。

それを恐れた俺は、全く知らない一人の少女に手紙を受けた。

つぐなうにはもう遅かった、俺の罪。

そして、俺が帰ろうとすると、大きな風が吹いて、帽子が飛んでいった。

「……さよなら、だな」

帽子を拾うのはひとまず諦める事にした。

俺は、夕空に向かって大きく手を振る。

明日は、自分らしくなれるかもしれない。

ふと、そう思った。

ハルローゲ（後書き）

今まで本当にありがとうございました！！
本当に書いて楽しかったです。
これからも小説書いていきますんで、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133a/>

コース

2010年10月10日07時17分発行